



2017年7月23日(日) 15:30/19:30 @日暮里d倉庫

作: 大植真太郎・児玉北斗 出演: 児玉北斗 制作: C/Ompany

上演時間: 約65分

引用:

クロード・レヴィ＝ストロース「生のもものと火を通したもの」早水陽太郎 訳 みすず書房 (2006) P.19

参考文献:

近藤宏「『神話論理』の解説に関する一考察」

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/ce/2009/kh01b.pdf>

大林繁樹「ゼロ記号の諸相とく排除されるもの」

<http://hdl.handle.net/10236/9160>

Blanchot, Maurice, "Who?" in *Who Comes After the Subject?* Cadava, Eduardo ; Connor, Peter & Nancy, Jean-Luc (eds.) (1991) Routledge.

Lévi-Strauss, Claude, "Mythologiques, Volume 1, The Raw and the Cooked" Overture p.1-32, University of Chicago Press, 1969

Johnston, Adrian, "Jacques Lacan", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/lacan/>>.



大植真太郎

1975年生 17歳で渡独し、18歳でバレエの登竜門、ローザンヌバレエコンクールにて入賞。

19歳からハンプルグバレエ、NDT、クルベリーバレエなどでダンサーとして活動する。

2001年、初めて振り付けた作品においてシルバーダンスプライズを受賞。2005年にはハーノーバー国際振付コンペにて最優秀賞、スカンジナビアグランプリを受賞する。

2006年よりフリーとなり、2008年には現在の活動の基盤となるC/Ompanyを立ち上げる。

近年、「談ス」全国横断16ヶ所ツアー、東京現代美術館においての展示、談スをシリーズ化させた第2弾「忘れる/ボレロ」ではボレロというクラシックの名曲に全く新しい方法で挑んでいる。



児玉北斗

ダンサー／コレオグラファーの児玉北斗は、幼少より両親のもとでバレエを始め、ヴァルナ国際コンクールなどで入賞の後、サンフランシスコバレエスクールに留学。2001年よりアルバータバレエ（カナダ）、レ・グランバレエ・カナディアン（カナダ）、ヨーテボリバレエ（スウェーデン）に所属の後、スウェーデン王立バレエ団ファースト・ソリスト(現在休団中)。Wim Vandekeybus, Mats Ek, Johan Inger, Alexander Ekmanなど世界的な振付家の作品の創作に参加、初演キャストを務めるほか、Ohad Naharin, Sasha Waltz, Crystal Pite, Sharon Eyalなどのレパートリーでも活躍。2013年にはJAPON dance projectを結成、2014年と2016年に新国立劇場の主催による公演を行い、振付・出演。同2016年公演ではDOHSA名義にて音楽も担当した。また、スウェーデン王立バレエ団の外部プロジェクト、Stockholm59Northの2017年公演では、照明デザイナーとして、Jerome Marchand, Anabelle Lopez Ochoa作品の照明を担当するなど、様々な視点からクリエイションに関わっている。2017年3月、トーキョーワンダーサイト本郷にて初の単独公演としてソロ作品「Trace(s)」を発表、好評を博す。現在、ストックホルム芸術大学修士課程（コレオグラフィー）に在籍中。

このテキストは、アフタートークの代わりとして、鑑賞後に読む事を想定して書いている。でも、書きながら、先に読んでもらっても構わないな・・・とも思っている。

- この作品の創作プロセスを通して、浮かび上がったのは、有限性に関わる問題だった。そこにない（ある）作品の存在を巡って、何かを生み出すよりも、すでにそこにある（ない）ものを浮かび上がらせようとする過程で、ぶち当たるのはやはり思考・言語の限界と身体のマテリアリティ。近寄る事もできない闘をまたごとと足掻くうちに、ダンスと呼べるようなものが浮かび上がってくるのを感じた。現代の規律化された身体が、張り巡らされた意味の網目をかいくぐって新しい空間を拓くことは容易ではない。一見ナンセンスに見える行為から、センスレスな空間を一瞬でも共有できれば、と考えながらの創作だった。
- こういった言語的な空間にダンスを探求する事は、ともすると言語を特権化し、身体を軽視するものと捉えられがちである。そこは二人の間でも慎重に話合ったつもりだが、しかし本作でも度々強調されるように、意図的に言語が「ない」ところには言語が「ある」のだと思う。私の力不足ゆえ、作品に表現しきれないところがあるのかもしれないが、言語とイメージの関係を一旦捉え直した上で、その隙間から逃走線を引こうとする試みである、という意味を、このテキストの限られた空間に、コッソリと置いておきたい。
- 各所に迷惑をかけながらも、この作品は途中の段階でソロ作品になった。二人共が出演者・振付者という立場にいれば、横並びにはなるが互いの主観から抜け出す事は難しい。だが、出演者としての視点と振付者としての視点という二項対立を一旦受容した上で、互いの主観に侵入を許しながらのフラットなコラボレーションは、逆説的に自分の視点が外にもあるかのような感覚を生み出し、作品中のテキストにも関連してプロセスに全く違う面をもたらした。クリエイションの実践の中でそのような経験に行き着いた事は、個人的に興味深い出来事だった。
- 「白鳥の湖」という作品は、その素晴らしい音楽のみならず、白と黒という現代に重くのしかかる二項対立や、そのエディプス・コンプレックス的なストーリー故、様々な読み方が可能であると思う。今回は、レヴィ＝ストロースと構造主義のイメージが最初にあったので、かなり外枠からアプローチをする事になったが、もしかしたら、また別の視点から「白鳥の湖」にチャレンジしてもいいかな？なんて思ったり思わなかったり・・・

最後になりましたが、このプロジェクトに誘っていただき、また有意義なプロセスをシェアしてくれた大植氏に、感謝しきりです。

児玉北斗

言葉と身体が生み出す「不ある」。

どれだけ語ろうと語りきれない、だからここに身体（表現）があるんだと、言いたいところだが、何かを伝えるために言葉（これ自体も身体として私は捉える）があるのだから言葉を使う。では仮に身体で何かを表す（言葉のない世界）ことは一体なんなのだろう？例えば日常において、言葉が出てこないで、イライラとしたことはないだろうか？そのイライラと言言葉で書いたが、それが身体なのだと思う。また、誰かを好きになった時、言葉にせずとも、身体が少し熱くなる、それもまさしく身体である。ここで気づく方はいると思うが身体の行為さへ我々は理解という意味では言葉を持って受けていることがわかるであろう。

しかし、そんな御託はダンスが見たい！っていうタイトルなのだから、とひっくり返してもらっても結構。ただ、今ここで起こる事は、ただアリキタリな身体性であり、特別な訓練を持ってできないことではない。なぜなら、そんな静かな身体性が、私の今までの形と対立して生まれているからである。

そんな静かな身体も表現として「あり」だと思う。そんな誠慎ましい身体性にびたりとくるのが児玉北斗であり、彼と共に作品を「ない」所から作り上げている。談笑に通づる対話の中から作品を創るということの他に沢山の本を読み、若干頭でっかちなねえ、って言われそうな時間を作りつつあるのかもしれないが、そこには”静かな時間”を優しくあなたの目の前に置くことで、時間をかけてあなたと対話したい。あなたの中に起こることが作品であり、目の前で起こることが「凄い・超技巧・見たことない表現・照明が良かった」などという言葉ではない言葉・表現・体現をこの作品でしたいと思っている。

わからないものに遭遇する、それは今の時代にあって一番必要なものであると思う。そこにどれだけゆっくりと時間をかけられるか？結果、もし理解するという位置に立てなかったとしても、何も無駄にはならない。無駄のない生活、日々、世界、そこには必要なものしかない、しかしそれは不必要な不という存在なしには存在しない。そしてこの作品ができれば、素晴らしい「ある不」であればと願う。

備考：「外から内を見る」

舞台作品における『アーカイブとは？』という疑問があります。そしてこの作品、「ない」ものをアーカイブするとは？更に困難な問題かもしれません。ただ、単に「映像を残す」という事ではない、と言い切った時に、なにか生まれるものがあるのかもしれない。

大植真太郎